

実践③ 鹿児島県立山川高等学校

1 はじめに

本校は、平成 30 年度に創立 70 周年を迎える生徒数 106 人（6 学級）の小規模校である。「自立・創造・奉仕」の校訓の下、「園芸工学・農業経済科」「生活情報科」の 2 学科の専門高校としての特色を生かしつつ、地域との連携にも力を入れている。また、生徒の個性に合わせたきめ細やかな指導を心がけ、学校全体で取り組んでいる。

本校図書館は蔵書数約 12,000 冊。年間の一人当たりの貸出冊数が 20.2 冊と利用者も多い。フラワーデザインや農業技術検定、被服制作のイメージを広げるために図書館の資料を使う生徒も多くいる。

公共図書館である山川図書館に隣接しているため、団体貸出やレファレンスへの対応、中高生ビブリオバトルへの参加など、公共図書館との交流も盛んである。



2 本校の実態

本校の生徒の読書に関する実態として、ライトノベルやケータイ小説などの比較的軽い読み物しか読まない生徒や、アニメやゲーム、YouTube などメディアへの依存度が高い傾向も見られる。

このような実態を踏まえて、生徒の興味を引きそうな内容や、漫画・雑誌等の貸出も含め、広い範囲で、活字から離れないように工夫している。

また、できるだけ生徒の話に耳を傾け、彼らの嗜好を否定しないように心がけている。人とコミュニケーションを取ることが苦手な生徒も多いので、意識して、図書館内で他学年の生徒同士が話しやすい雰囲気になるように配慮している。

近年、スマートフォンの普及により、ネットトラブルに遭ったり、インターネット情報をうのみにしたりしている様子に危惧している。そこで図書館の役割として、正しい情報を得る方法や情報を発信する責任も含めて、情報リテラシーへの対応も必要と考えている。

3 具体的取組み

(1) 図書委員会活動（通常の業務に加えて）

ア 先生へのインタビュー（図書館だよりに掲載）

インタビューを依頼する先生との日程調整を含め、できるだけ生徒主体で行っている。目上の人と話をするよい機会になっている。



イ 朝読書（朝学習の 10 分間を使って不定期に実施）

基本的に自分の読みたい本を読むのが理想だが、不定期の実施のため、本を忘れる生徒も多く、そのような生徒のためにテキストを準備してきた。読んだテキストが面白かったとの声もあり、今年度は全校生徒分を準備している。不読傾向の生徒が、本を読むきっかけになればと思う。

ウ 一斉読書会（年一回秋の読書週間に合わせて実施）

図書委員が録音したものを、朝読書の時間に 10 分ずつ校内



放送で流している。今年度は『SNS 炎上』（NHK オトナヘノベル編）から一編を朗読。同じ作品を共有し、実施後に作品についての感想を語り合う姿も多く見られた。

エ 文化祭発表（ステージ発表）～平成 29 年度

ステージ上で、生徒による絵本の朗読と、図書委員一人一人の作品に対する意見や思いを発表した。この作品は、福島原発事故後も被ばくした牛を飼育しつつけている牛飼いの話だが、委員会の話合いの中で現在の福島の様子を調べたり、自分の経験なども踏まえて意見を述べたりするなど、それぞれ多様な意見が出された。

自分の意見を発表することに慣れていない生徒も多かったが、一つの作品としてまとめることができたのはよい経験になった。



書名：希望の牧場
作：森 絵都
絵：吉田尚令
発行所：岩崎出版

(2) 公共図書館との連携

隣接する公共図書館とは、団体貸出・レファレンスの協力などはもちろんのこと、図書館業務のことも相談している。「中高生ビブリオバトル」もこのようなやり取りの中で始まった。少ない人数の中で、ビブリオバトルを楽しんだ経験は、次につながり、指宿市生涯学習フェスタの「中高生ビブリオバトル」では、高校生が本について語る姿を市民に見てもらうよい機会となっている。



【公共図書館での様子】

(3) 校内ビブリオバトルの取組

公共図書館でのビブリオバトルをきっかけに、校内でも行うことになった。初めて体験する生徒たちは抵抗を感じるようだが、うまく語ろうとするのではなく、純粋に自分の好きなものについて語り「本を通じて人を知り、人を通じて本を知る」機会として地道に活動していきたいと思う。



【校内ビブリオバトルの様子】

4 今後の課題

(1) 不読傾向の改善

貸出冊数を増やすことを最優先するのではなく、読書意欲のない生徒に対して、ビブリオバトルやブックトークなどいろいろな手法を取り入れることによって、次につながっていくような、本を楽しむ経験を大切にしたい。

(2) 授業支援・先生方への対応

授業の中で図書館の資料を使ってもらえるか、図書館としてどのような授業支援ができるのか、先生方ともっとコミュニケーションを取りながら、図書館利用を推進していけるよう努めたい。

5 おわりに

本校に勤務して6年になり、課題が増えるばかりであるが、生徒たちが卒業した後の生涯学習を支える基盤として、学校図書館の責任の大きさを実感している。本になじみのない生徒に、本の楽しさ、調べて分かる楽しさを伝えていけるよう、日々研さんを積んでいかなければと思う。